あさ 2

2020

須賀忠男のBird Note

画眉鳥
(ガビチョウ)
中国の飼い鳥
と云われる
美しい鳴声だと!
長ーく鳴く
でも少しウルサイ
かな?

あさ

二月集

佐藤　喜孝

火燵

心中のかたはれのごと冬至風呂
西班牙のザクロと三ヶ日蜜柑かな
蓮根を買ひたくおもふ冬の雨
きのふとの間違ひさがし書こたつ

降ることに餘念のあらぬ冬の雨
とりあへず鍋に水張り十二月
浮雲を遠くにさくらの芽びっしり
ゆく雲をいくたびおくるさくらの芽
新樹ゆくきれいな水を浴びながら
秋の海に對ひ二人とひとりかな
夜明け前花野に色を差してゆく
ススキから芒尾花と日の暮るる
湖の霧を集めて中の島
濃淡を霧の意のまま湖の島
およながよなどと蜜柑の皮溜まる

埼玉　秋川　泉

十二月

立ち読みにふけりてのちの夕時雨
建前の木遣朗朗十二月
長屋門五十人余の芋煮会
曲線の勝鬨橋に時雨雲
天に抜けビルの乱立年迫る

埼玉　大日向幸江

パイプオルガン

パイプオルガン風の音立て聖夜かな
黄昏や橙色のお月様
年忘れ電話に聴くやカラオケを
寒菊の紫苦しもってのほか
手の爪の伸びる早さや帰花

東京　七郎衛門吉保

ステンション

陸蒸気のステンション跡冬の雨
木枯の抜け道にありステンション
維新志士の気概を残しステンション
冬靄に浮かぶビル群シオサイト
冬波は遠くになりし浜離宮

東京　篠田　純子

汐留

幕府海軍所の地面濡れけり冬の霧
さぎ一羽行つたり来たり冬もみぢ
冬の霧水門に船はまりさう
冬靄の橋の点滅鼓動めく
裸木は電飾巻かれ昼の月

東京　篠田　大佳

身支度

身支度の夢を見てゐる十二月
小晦日掃除が嫌で掃除する
海老天のみ購ふ爺や大晦日
客引の少女手を振る十二月
寒夕焼うそつくときの笑顔かな

石川　定梶じょう

拾遺

笑ってゐるばかりでないぞ開戦日
歳末も人なか寂し眼科出づ
冬菜青くひとりの日々のある日茹づ
出前持出そびれてをり春一番
遠眼鏡ゆすらの花でありにけり

東京　須賀　敏子

短日

新橋の旧停車場の冬木立
短日や月に一度の通院日
短日や図書返却へ急ぎ足
百合樹の冬木になりてより高し
柚子風呂に溜息二つ沈めけり

東京　田中　藤穂

地球儀

地球儀を欲りつつ過ぐる十二月
駅前のパン屋聖樹を煌めかす
どの道も紅山茶花の散ってをり
冬の雨あがりビル群呼吸はじむ
奈良の世の瓦に文字冬の雨

三重　長崎　桂子

初時雨

恐竜の牙剥くに似て冬の雲
年の瀬の食と片付けもう暗し
マスクして漕ぐや挨拶おろそかに
寄鍋や舌鼓して明日の備へ
急ぎ足駆けだす人も初時雨

東京　森　なほ子

汐留眺望

どの傘も師走の雨を来し雫
遠近のビルの墨絵や冬霞
冬霞挽茶羊羹色の河
冬霞重機蠢く市場跡
クッキーのやうな古瓦クリスマス

東京　赤座　典子

年の暮

わが街のホールに「四季」の年の暮
ベランダの目白にきざむ冬林檎
しあわせを説く人の行く冬の街
ジャージーの女生徒の群北風を行く
煮凝や内なる声を閉ぢ込めて

佐藤　恭子

京訛

かんらからと笑ってみたき新走
鬼の子の揺れて遠くへ飛ぶつもり
直角に折れて曲がって蓮の実
初詣坂をころがる京訛

前月抄

海へ一歩寄りて見送る鴈の棹　佐藤　喜孝

父と娘のしりとり速し冬萌ゆる　赤座典子

晩秋の雨のそぼ降る露天風呂　秋川　泉

丸顔の猫蹤いて来る小春かな　大日向幸江

秋澄むや狩行見下ろす摩天楼　七郎衛門吉保

チンドン屋の聖者の行進年の暮　篠田　純子

玉子酒恋に似てゐてこひでなし　篠田　大佳

障子貼りかへて畢竟富むごとし　定梶じょう

塩原の白き流れの落葉かな　須賀　敏子

公園のこわれたチャイム暮早し　田中　藤穂

今朝も行く土手の並木も冬紅葉　長崎　桂子

この雲は雪国の雲黄葉山　森　なほ子

歩けあるけ五臓六腑が春になる　佐藤　恭子

喜孝　抄

十二月号作品より　七郎衛門吉保・赤座典子・佐藤喜孝

大久保から東中野とつづれさせ　佐藤　喜孝

大久保と東中野は、中間にある神田川を挟んで、ＪＲだと中央線か総武線、道路だと大久保通りか早稲田通りで繋がる道筋。この辺りにはお隣の国や、東南アジアの国々に関連した、食材店・雑貨店・エステ店やレストランが軒を連ねている。自ずと集まる人もそれらの国の人が多くなる。見える街の看板も多国語、行きかう会話も多言語。これらを「つづれ」と見たのだろうか。（吉保）

台所の窓一面に鰯雲　大日向幸江

魚に関わる名前の秋の雲が三種あった。サバの背の波状の模様に似た鯖雲。魚の鱗のように丸形の小さな雲が集まる鱗雲。そして鰯の群れのように見える鰯雲。何れも高度五千ｍから一万五千ｍの高空に発生する巻積雲の俗称とのこと。同じ雲ながら形の特徴を掴み、固有名詞で使い分ける日本語の風情にここでも感心。焼きや煮の魚料理をしながら、台所でふと窓見上げたら鰯雲。（吉保）

秋日和歩荷ゆっくり擦れ違ふ　須賀　敏子

この句の初見で「歩荷」は何と瞬間迷ったが、はたと「ぼっか」と気が付いた。数十kgから時に百kg近くの山小屋用品を、背負子で運ぶ歩荷。ゆっくりと登る大きな後姿は、荷物が歩いているようなので、歩荷と名付けた日本語の、表意文字の素晴らしさ。更にこの読みを「ぼっか」と誰が名付けたのであろうか。ここに日本語の表音文字としての素晴らしさが、あるように思える（吉保）

もう要らぬものの多さよ鰯雲　田中　藤穂

私たち夫婦は二人とも旅が好き。多方面の旅をしてきた。旅先で買い物をする楽しみも、重要な要素だった。例えば国内の旅では、土地の風物を表現する土鈴を、必ず買うことにしてきた。二百を超える土鈴が壁を飾っている。土鈴以外にもその他累々である。一月末に越中高岡周辺の旅をしてきた折、「もう要らぬ」と言いながら、土鈴を買ってしまった。正しく鰯雲のごとである。（吉保）

天高し銀杏大樹に小さき葉　森　なほ子

大樹と云われている銀杏は、樹高三十ｍ、幹回り十ｍを超える。中にはそれを超えて四十メートル・十五ｍ近い巨樹もあるようだ。神宮外苑には、樹齢百年の大樹が百四十六本、道を挟んで均整の取れた並木がある。一本の大樹には二十数万枚の小さき葉が付いているとのこと。これが一気に落葉し、黄色の絨毯を敷き詰めた並木道に変身し、人気日本一の紅葉スポットになっている。（吉保）

まへぶれもなくばんしうがやつてきた　篠田　大佳

「前触れもなく」と組合せて、状況や経過を表現する対象としては、地震や噴火など天地異変・天候の急変・病気・人の訪れ・不吉なこと・などだろうか。四季の訪れを、「前触れもなく」と組み合わせられるのかは判然としない。しかし、地球温暖化の影響で季節がずれ込み、四季変化が不明瞭になりつつある様を見ると、作者が「まえぶれもなく」と警報を発した句とも読める。（吉保）

晩秋の雨丁寧に降りて去る　　佐藤　喜孝

秋の終わりの雨が、街に穏やかに行き渡った後、消えていった。「丁寧」と「去る」という言葉で、街の静けさがしみじみと伝わります。蛇足ですが丁寧という言葉が、最近正しく使われていないと、残念に思っていました。この句を読んで、ほっといたしました。（典子）

台風過病みぬき虎鉄旅立ちぬ　　秋川　泉

以前、我が家で十数年暮らした茶トラ猫は、少し体調を崩した後、突然いなくなってしまいました。昔からの言い伝え通り、自ら姿を消しました。でも虎鉄は、力尽きるまで泉さんのそばにいたかったのでしょう。そして望みが叶いました。（典子）

暴風雨明け洗い晒しの銀座さやか　　篠田　純子

今年は大きな台風に、度々見舞われました。突然に襲ってきた台風が終わってみると、銀座の街

も、洗い尽くされたように、小ざっぱりとしているようです。銀座の街が大きく広がり、絹から木綿に変わったような、清々しさが素敵です。（典子）

犬小屋に敷いて新藁ここころ和ぐ　　定梶じょう

出来立ての今年藁は、きらきらと輝きふかふかです。高く積まれた藁の寝床で、大喜びで跳ねていたハイジをおもいだしました。入れ替えてもらった寝床で、定梶家の愛犬も、暖かく気持ち良く眠れたことでしょう。（典子）

拡大鏡使ふ暮しや長き夜　　長崎　桂子

拡大鏡といえば、シャーロックホームズの虫めがね型が一般的ですが、我が家にあるのは、柄のない置き型です。最近は画数の多い漢字が、裸眼では今一はっきりせず、お世話になっています。やはり日の落ちてからの方が、利用が多いです。（典子）

柔き風に頬をさしだす芒原　　赤座　典子

あまりの風の心地よさにこちらから頬が風を迎へにいった。「さしだす」は、権力者に提出する意もあるがここでは、幼子がチューをしてくれると云ふときにさしだす頬である。風にそよぐ芒も良い揺れ案配。「さしだす」に自然に同化した心持ちが全て出てゐる。（喜孝）

野分去りのたりのたりの大西洋

七郎衛門吉保

「のたりのたり」と云へば、春の海を与謝蕪村がさう詠んだ。作者先刻承知の上。昨年秋ニューヨークからカナダへと船旅をされたをり台風に遭はれた。台風は地域により違ふらしい。ハリケーン・タイフーン・サイクロンなど。作者は古風に「野分」と。大西洋の野分とはおもしろい、いやおもしろがってはいけないのだ。嵐の去った後の大西洋を作者は「のたりのたり」としか云ひやうがなかった。蕪村をリスペクトしての時と場を違へた「のたりのたり」である。（喜孝）

氏神様

長崎桂子

一月一日の午後に氏神様に初詣し、お祓いを受ける年始を、もう三十七年ほど続けております。

思えば幼い頃から、祖父母の何かと折に触れての教えだった、と記憶もあり、私の心の拠り所でもあります。

明治神宮

田中藤穂

突然大晦日の晩に父が私たち兄妹五人を連れて明治神宮へ初詣に行くという。

原宿駅も神宮の参道ももう混んでいて人たちの玉砂利を踏む音が闇に響いている。所々に篝火が焚かれ参詣の人波と神宮の森の木々が赤く照らし出されていた。あの後戦火の火も随分と見ている筈だが、小学生の時に見た明治神宮の篝火の燃え盛る真赤な焔の色が心に焼き付いて忘れられません。

七福神

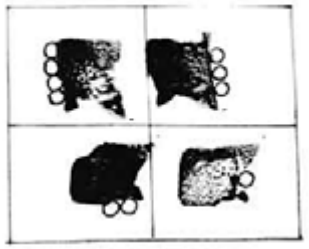
須賀敏子

一月のハイキングは初詣と決め、各地の七福神詣でをしている。大して信仰心もないので、わずかなお賽銭で健康のみを祈っていた。

二〇二〇年は、品川の東海七福神を予定している。孫娘の高校受験の年なので、お賽銭をもう少し弾み学業成就を祈ろうと思っている。

はしかて集

佐藤喜孝



秋川　泉

しぐるるや法要のある深大寺
法要の雨のしづかに冬ざるる
冬の月あたり静まり人の声

◎◎二様に読める。ひとつは法要にかかはりがあって深大寺を訪ねた。も一つは散策で深大寺を訪ねたら偶々法要が営まれてゐた。一句目は後者に読め、二句目は前者に読めた。が両句とも前者であらう。両句とも多くを語らぬ処に好感を持った。

◎少々大掴みな表現で句意が伝はりにくい。「あたり静まり」は街のざわめきであらうか。

大日向幸江

煤払ひ猫の蒲団を新しく
凩や満天の星仰ぎ見ぬ
足に湯をかけて柚湯に髪を梳き

◎新年を迎へる準備をしてゐる。序ででもないが愛猫の蒲団も新しくした。猫の座布団ですっかり新年を迎へる準備が調ったやうだ。

◎冬至湯の入浴の様を実況中継のように丁寧に述べてゐる。作者の句としては、前句と共に物足りない。

七郎衛門吉保

終活や賀状廃止と書き送る
落葉掻き眠りの前の墓の居り
古木にも太き添え木の年用意

◎作者と私はおっつかっつの年齢。しかし私より数段元気で行動範囲も広い。その人が賀状廃止の思ひに至るとは……少し驚きました。わたしは数年前から賀状を欠礼してゐる。それまでは二百枚ほどの賀状をアイデアから始まり準備制作、宛名書きで暮と正月に時間と取られた。四日が仕事始めだったので三が日に何とか投函をと頑張った。吉保さんの賀状は手が込んでゐる。ご苦労さんでした。かうして賀状と云ふ習慣は静かに消えてゆくのであらうか。

「終活」は「就活」から来てゐる。「就活」は「就職活動」をはしょった。断捨離もよく見聞きするが、生すぎて俳句に使ひ難いことばたちだ。

◎落葉を掻いてゐたら眼前に動きの鈍い蟇に出遭った。「冬眠」と使ひたい所を避けた推敲の跡が見える。述べるのをここまでで止めるのは研鑽の賜。「落葉掻き」は動詞とも名詞とも読める。「落葉掻」で切れて句姿がすっきりする。

◎面白い所に目が行った。「年用意」の季語斡旋に感心した。「古木にも」のも。作者承知の上でも「も」の使用とおもふが、やはり気になる。「老木に太き添え木の年用意」。

須賀　敏子

開戦日今年も白菜漬けながら

年の暮海自中東派遣決め

数へ日や歩くプールで追ひ越され

◎敏子さんは日記のやうに俳句を作られてゐると聞いたことがある。少し拾ふと「名画座で過ごす八月十五日」「図書館で黙祷八月十五日」「山歩きながら十二月八日暮れ」などがある。勿論家族の、孫の成長も句に書き留めてゐる。淡淡と「今年も」去年と同じ事をしているはと思ひつつ、白菜を干して漬けてと作業をしてゐる。

◎作者はこのやうな内容を俳句にする時、新聞の見出しかと思ふやうに素っ気ない。何か一言言はなければ気が済まぬ人ではない。じっと思ひを溜めてをられるのであらう。

◎我が道を行く作者である。ぶれることが無い人生。内剛外柔といふところ。

田中　藤穂

植木屋と童女のしゃがむ龍の玉

銭湯の跡地広々冬の星

要らぬもの身ほとりにおき冬ぬくし

◎植木職人と童女が龍の髯の植え込みにしゃがんでゐると云ふほほゑましい光景。作者も心惹かれて一句にしたためられた。この家に定期的に這入ってゐる植木屋さんだらう。童女とも顔なじみ。昼餉の後かお茶の後かの寛いだひととき。「しゃがむ」といふ砕けた言い方が功を奏してゐる。

◎わたしもかういふ場に行き合ったことがあった。まだ取り壊し中で定番の富士山が日光に晒され異様に思へた。探せばどこかに写真があるはず。この句は、すっかりすでに建物は取り払はれてゐる。お風呂屋さんも時の流れには抗しがたかったのだらう。お世話になりました。作者の頭の中にはまだ銭湯の残像が遺ってゐるのだが、そこには冬の星が瞬いてゐる。銭湯を使はぬ人でもこのやうな建物が消えてゆくのに一種の感慨を抱く。心の空白感に繋がる「広々」である。

◎「断舎利」と近頃よく聞く。この句、要らぬものと思ひつつも身辺に置き生活してゐる。空間が許せばそれもありかと思ふ。片付けると云ふエネルギーは大変要る。わたしは死後のことを案ずる

より、生きてゐる今に時間と体力が必要。父母の着物や袴もまだ処分してゐない。後は野となれ山となれの気分である。要らないけれども懐かしいものに繋がる物に囲まれての日常、まさに「冬ぬくし」。

長崎　桂子

はや日陰人通りなく枯芙蓉
室咲の鮮やかないろ香に噎せる
健を心がけをり冬至風呂

◎芙蓉の枯れ姿を町中でよく見かける。面白いかたちの実を付ける。わたしも立ち止まって見入ることがある。作者もさうなのかも知れぬ。「はや日陰」はだうだらう。日陰は大方日の射してゐる時の陰。この句は夕方の謂と思ふ。も少し相応しい言葉を選んでも良いかなと。云はれてみると、枯芙蓉は昼日中よりこの句のやうな時間帯の方が存在感があるやうだ。

◎俳句は目に見えるやうに作るのが基本だと思ふ。この句は雰囲気は豊富に伝はるがどこか芯に欠ける。「室咲の○○の花香のあふれ」とか。

◎「健」一字、訓読みがだうも解らなかった。「健やかを」なり「健康を」のどちらかの書き忘れか。わたしも冬は特に風邪に気をつけてゐる。コロナ風邪が話題になってゐるので特にさう。風呂に

入ると本当に極楽と思ふ。ミャンマーの婿がシャワーで過ごして不都合がなかったのに、同居して風呂に入ったら風呂好きになった。ところが老人の入浴が死因の一つとニュースで騒がれる。なんにしても老人は気が許せない。

森　なほ子

義士祭の義士の面々ほがらなる
薄紅の空や聖樹の灯さるる
生ぬるき地下アーケード毛皮売る

◎義士祭は一九五〇年に泉岳寺で始まる。忠臣蔵は演劇・映画に欠かせぬ演目。日本人が好むお話である。進駐軍がチャンバラや仇討ちの話を禁じたのも解る。ほっといたらアメリカが仇討ちの対象になると思ったのだらう。これから先は解らないが、今のところ全く杞憂である。「面々ほがらなる」でも解るとおり、クリスマスやハロウインと同じくイベント化してゐる。これから死を迎へる人も「ほがらなる」でホットするところ。

◎夕つ方、クリスマスツリーに点灯された時に行き合った。自然光と人工の明かりとの交差する光景。クリスマスツリーもスとツの間に空白など入れないとまずいのだらうか。この句は聖樹、宗教感がこの方が豊か。でも white shirt がワイシャツと云ふ日本語になったのだからカタカナにした時点で原語とは別の日本語になったのかも知れぬ。目くじらを立てるのは野暮なのかも。

◎これみよがしに街を毛皮で歩いてゐた時代があった。

襟巻の狐の顔は別にあり　高浜　虚子
毛皮に眠る終電勤の翳かくせず　高島　茂
裘鼠鳴きする月夜かな　八田　木枯

今、豹柄を見ても本物と思ふ人はゐない。「生ぬるき」は作者の鋭い感性。毛皮店との取り合はせの妙である。

赤座　典子

銀座通り壷の大きな焼き芋屋
新海苔をひらひら配る築地かな
きりをつけ大晦日の投句かな

◎正に属目吟。写真のシャッターを押したやうな句を属目吟と云ふ。そこからインパクトのある作品なるか、記録にとどまるかは写真と同じく微妙。読者に期待する所が多い。
◎この句は前句とすこし違ひ「ひらひら」といふところに大袈裟に云へば批評眼が見える。「ひら

ひら」が効果を上げたおもしろい句。
◎わたしも句会に出かけたのは好いが、全く出せる句がない時がある。あせればあせるほど頭が硬くなる。普段の不勉強の答が出てしまふ。同情ばかりはしてゐられないわたし事だ。

密蔵院

秋川　泉

里の寺で暮らしておりました時は、三十一日の除夜の鐘撞から、元日の修正会の護摩まで参詣する方々の接待に目の回る忙しさで、眠る時間がほとんどないのが常でした。在家に嫁いでからは元日の手伝いと修正会の大般若の祈祷護摩に与るというお正月になりました。嫁いだ土地の氏神様に詣でるのは二日になり、元日は今も密蔵院不動明王、弘法大師に年の安寧を祈ることで始まります。

剽窃

定梶じょう

パロディーという言葉はどちらかといえばいいイメージをあたえない。「言語遊戯の一つ」と辞書の説明にあるのが影響を与えているかもしれません。もっとも昨今は相当違ってきているようで、文学は無論、絵画、写真でも大いにパロディが用いられていますね。中でも短いことばの俳句は利用し易いのでしょう。放哉の自由律

　咳をしても一人

のパロディ句は今までいくつみてきたことか。近年、

　咳ひとつしても放哉にはなれず　計介

が新聞投句にありました。作者は私の近辺に住まう方。

　江戸期には、新古今の歌よりとって

　世にふるもさらに時雨のやどりかな　宗祇

が有名ですし、さらに芭蕉が付けて

　世にふるも更に宗祇のやどりかな

がありますね。江戸後期には

　秋来ぬと目にさや豆のふとりかな　大江丸

があって、パロディ。現代に入ると

　蓑虫の父よと鳴きて母もなし　虚子

は枕草子から。中原道夫さんには

　週刊新潮けふ発売の土筆かな

がある。わが『あを』にも

　落花生内者富良富良外者須夫須夫　喜孝

がありました。

　東海の小島の磯のおでんかな　辻征夫

は「磯のおでん」に疑問を持つかたがあるようですし、

　古池や蛙飛び込み複雑骨折

作者名忘却しましたが池が干上がっていた。

　わらやふるゆきつもる　井泉水

を摸して拙句

　犬小屋ふる雪はつもり

を作ったのは口語俳句をめざしているころでしたが、すぐに挫折したのでした。

　話しことばと文章語のせめぎあい。但し、口の悪い友人が言いました、この句パロディというより剽窃だ、と。

手裏剣の飛んできさうな余寒かな　亀田虎童子

佐藤喜孝

人様の俳句を読んでゐるうち句中の語彙が欲しくなる癖がある。この句の「手裏剣」がそれに当たる。何故欲しくなったのか少し考へてみた。むかし読み胸躍らせた忍者もの。子供の頃は手裏剣の名人にならうと練習したが、木に刺さりもしなかった。そんな懐かしさもあったのかも。でも一番惹かれたのは、俳句らしい言葉でなかったからだ。俳句は雪月花、花鳥風月とばかりに使ひ慣れた言葉を使ひまはししてゐる。わたしもさうだがそんな時に「手裏剣」は活き活きとして見えたからだ。さうおもふと作ってみたくなる。今月の定梶じょうさんではないが、パロディや剽窃を畏れず作って句会に出した。がやはり借り物の弱み無声であった。ちなみに「手裏剣を折りて當てたき春の人」。一年前の話である。わたしの手裏剣は本物ではない。まだ本物を見たことはないが、「シュリケン」と口にすると日本語でないやうな若やいだ響きがする。このやうな言葉を使ふ人は若い人、遊び心がある人と思った。作者はたしか今年九十四歳になられるはず。負けてはゐられない。

中川句寿夫さんをしのんで　七

鳥渡る村を輪島のお膳売り
かいば桶浸してありぬ紅葉川
雪の戸を余さず廻る刃物売り
兎罠仕掛けほどよき雪が降る
町薄暑提灯張り替致します
時の日のあるだけの鎌出して研ぐ
傍目にはどれも見劣りせぬ青田
泥鰌堀りをれば尼さま通りけり
捨案山子大きな月が上りけり
紙を漉く紙が風邪引く話など

以上の十句は　どれも地方色豊かでのどかな光景が想像出来て楽しかったです。時を経て詠まれた句にとても身に沁みるいくつかがありました。

厳選しての四句を追加させていただきます。

藍浴衣着て襟足といふところ
撃たれたく父が出てくる水鉄砲
耳遠くなりたる分を朝寝せり
買ひ置きのものを買ひ足す敗戦日

赤座典子　抄

あをキーワード俳句辞典（はなーはな）

話

減額の年金話竜の玉　井上　石動
談話室で主治医の書展額の花　斉藤　裕子
法話済み人帰りゆく盆の月　秋川　泉
初夢や麗し男の子と話せり
のどけしや話途切れぬ露天風呂　赤座　典子
実南天駅まで二度の立話
秋日今膝は如何と立ち話
水打つて話はそちらさま次第　中川句寿夫
茸番の今は昔の話かな
立ち話垣根越しなり夏至の夕　黒澤佳子
夏の熊出で来話題の温泉町　七郎衛門吉保
初夢を話おかしく朝餉かな
縫ひぐるみとお話してる秋夜長　田中藤穂
女優死す昔話の寒雀　大日向幸江
退職し生き甲斐の話事始　長崎桂子
溝浚治療の話口口に
秋暑し死後の話に盛り上り　森　なほ子

咄

夜咄や露地も茶室も昔の灯　芝　尚子
夜咄や蝋燭の芯切る手際
咄家は末広で蕎麦喰い酒を呑む　木村茂登子
咄家の話半ばに羽織ぬぐ　藤野　寿子
咄家の七輪かまど昭和の日
渡り鴨仕留めたる夜の咄かな　井上　石動

噺

柔冬芽うすき唇から作り噺　佐藤　恭子
寄席噺に笑つて忘れ夜の秋　芝宮須磨子
虹消えてお伽噺の国も消え　木村茂登子

放す

蚊遣香ただよふ庭に犬放す　山荘　慶子
夜の秋馴染し一書手放さず　関口　ゆき
流燈やその幼子の手を放すな　竹内　弘子
放されて犬の駆け下る土手青む　早崎　泰江
レール凍て貨車突き放す音生まる　渡邊　友七
初明り雨戸すべてを明け放す　長崎　桂子
秋うらら爪繰るものを手放さず　赤座　典子

洟

水洟の工夫は霜の道路掘る　栢森　定男
洟垂る児のそれなりに可愛くて　須賀　敏子
臨終とて弱音は吐かぬ水洟　篠田　純子
水洟や宮番板の間に侍すも　定梶じよう
花粉症と気づかぬままに水っ洟　芝　尚子
水洟や犬の嫉妬をしてをりぬ　早崎　泰江
たそがれの道に道聞く水洟　篠田　純子
水洟や門下と言ふもをこがましい　中川句寿夫

あとがき

校正のお願い

『あを』はネットでまず配信します。配信を会員各自にお知らせをします。会員様に校正していただきます。その結果をもって印刷に這入ります。よろしくお願いします。

コロナウイルス

武漢から広がったこのウイルス騒動、いや事件。いろいろな名前で呼ばれた。ＷＨＯが名付けた名前は殆ど使はれず「コロナウイルス」が通称化した。お陰で句会も休会、寂しい限りである。この先だうなるのか専門家を含め見通しが立たぬやうだ。学校も休校。孫息子は野球が出来ずストレスが溜まってゐるやうだ。孫娘の方は好きなだけ絵が描け、好きなだけゲームが出来ると活き活きしてゐる。変な事件が起きなければと取り越し苦労をしてゐる。（喜孝）

題詠「紅」

締切日　三月二十日の決定！

二〇二十年二月号
発行日　二月二十八日
発行所　東京都中野区中央２-50-３
電　話　０９０　９８２８　４２４４
ファックス　０３　３３７１　４６２３
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番０１８）４５８６４０２
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）